

法然の阿弥陀仏解釈

——『逆修説法』と『阿弥陀経略記』との関連性——

齋 藤 蒙 光

はじめに

法然の六日に渡る説法の記録と伝えられる『逆修説法』では、各日の説法の前半において「仏の功德を讃歎する」という目的から、阿弥陀仏の説明がなされる。そこでは源信の著述が多用されるのだが、今回は『阿弥陀経略記』(以下、『略記』と記す)に注目したい。法然は『逆修説法』三七日の仏徳讃歎において、源信の説として、諸仏国土における仏・衆生の寿命に関する四句分別と、阿弥陀仏の寿命に関する解釈を紹介している。⁽¹⁾その出典が『略記』の「明⁽²⁾三⁽³⁾弥陀名義⁽⁴⁾」という一段にあることは先行研究において指摘されているが、その一段中には他にも『逆修説法』の仏徳讃歎と相似する記述が多数存在する。紹介していこう。

一 仏身論

『略記』の件の文では、まず仏身論が説かれる。

一切ノ諸仏ニ総ニ有ニ二身。一ニハ⁽¹⁾者真身、住ニス報仏ノ土ニ。二ニハ⁽²⁾者応身、住ニス同居土ニ。西方ノ化主ハ是レ一応化也。故彼ノ名号亦随⁽³⁾ツテ応ニ立⁽⁴⁾ツ。

源信は、一切諸仏に真身・応身という二種の身があるが、西方極樂浄土に住まう阿弥陀仏は応化身に該当すると述べる。

『逆修説法』一七日の仏徳讃歎も仏身論より始まる。そこで法然は、「今且ク以⁽¹⁾ニ真身・化身ノ二身⁽²⁾ヲ、奉⁽³⁾レ讃⁽⁴⁾ニ嘆⁽⁵⁾ニ弥陀ノ之功徳⁽⁶⁾」と述べ、やはり二身論を用いる。ただし法然は、四十八願を發し六度万行を完遂した、酬因感果の阿弥陀仏こそが真身であると述べ、その阿弥陀仏より「円光」「來迎引接」「攝取不捨」の化身などが現わされるのだと説く。つまり、阿弥陀仏は真身・化身を共に具えると解釈している。

二 「無量光」「無量寿」の数量

『略記』では、続けて名号解釈がなされる。

於「阿弥陀ノ一ノ梵語」中ニ含ス無量光・無量寿ノ義。無量光トハ者如レ文。…総メ計レハ之ヲ、一相ノ中ニ具ス七百五俱胝六百万光明^ヲ。正使和ニ億千ノ日月^ヲ、其光熾燃ナルモ、不レ可レ得レ比スル^ヲ。八万四千ノ相モ一ニ亦如シ是ノ。無量寿者、亦タ如レ文。…『大論』ニ曰ク、「無量億阿僧祇ト与ニ恒河ノ者多数、理同シ^云。諸文雖レ異也ト、彼土ノ寿量、大都一恒河沙数劫ナルノミ耳。

源信は、「阿弥陀」は無量光・無量寿を意味すると述べ、その一相あたりの光明の総量は「七百五俱胝六百万」であり、寿命の総量は「一恒河沙劫」なのだと説明する。

『逆修説法』三七日の仏徳讃歎において、法然も「阿弥陀」すなわち光明・寿命を話題とし、前述のように『略記』の寿量の解釈を受用する。光明に関しては、『往生要集』より「一々ノ相ノ中ニ、各具ニ七百五俱胝六百万ノ光明^ヲ、熾燃赫奕^{タリト}」と引用するが、続けて「從ニ相ノ所レ出ス光明、如レ斯ノ。況ヤ八万四千ノ相^ヲ乎。」と述べている。この表現は、『略記』の「八万四千の相も、一一亦、是の如し」という言葉と似ており、法然は『略記』も意識している可能性がある。

三 横豎の益

『略記』では光明・寿命の説明が続く。

此之ニ義ハ、顯横豎ノ益^ヲ。…常光一尋^ハ雖レ常也ト非レ偏。別縁偏照^ハ

法然の阿弥陀仏解釈（齋藤）

雖レ偏ト非レ常ニ。此仏ノ光明ハ即不レ如レ是。經ニ無量劫、偏ク照^ス十方^ヲ。問。仏ト与ニ衆生ノ寿同シ。光明、何故ニ不レル。答。若威光劣ナラハ、尊重不レ深。寿命ハ設シ短ナラハ、還テ生ニ戀慕^ス。故ニ凡ソ諸仏寿、随レテ宜ニ不同也。或ハ有ニ仏ハ長ク衆生ハ短キ、如シ未來花光仏世^ノ。或ハ有ニ仏ハ短ク衆生長キ、如ニ東方月面如來ノ、彼仏寿命一日一夜也。或ハ有ニ俱ニ長キ、如ニ極樂國^ノ。或ハ有ニ俱ニ短キ、如ニ今ノ仏世^ニ。

源信は、光明は横へと広がって十方世界の衆生を摂取し、寿命は豎に延びて無数劫の衆生を摂取するのだという。⁽⁶⁾光明については「常光一尋」と「別縁偏照」という二種の光明を挙げ、前者は常に照らす十方には行き渡らず、後者は十方に行き渡るが常に照らす訳ではないという。それらに対して、阿弥陀仏の光明は無数劫に渡って十方世界を照らすのだと解釈する。また、寿命については、種々の仏土における仏・衆生の四句分別を記し、阿弥陀仏と極樂の衆生の寿命がともに長いことを論じる。

『逆修説法』三七日の仏徳讃歎において、法然は前述の通り、『略記』の寿命に関する四句分別を受用する。また、光明についても次のように説いている。

大方タ彼仏ノ光明ノ功德ノ中ニハ備^{タリ}如シ是義^ヲ。細カニ明ハ者、可レ有^ル多種。大ニ分テ有^レ二。謂タ一ニハ常光、二ニハ神通光ナリ也。⁽⁷⁾

「常光」「神通光」と表現は異なるが、『略記』とはほぼ同内容の

分類を用いる。ただし、常光に關しては、『往生要集』を参照して阿弥陀仏の頭光もしくは身光なのだと述べ、神通光に關しては『觀經』の「光明遍照…撰取不捨」の文を挙げる。

四 名号に対する密意

『略記』は、光明・寿命の説明の後、独自の名号解釈を展開する。

若シ作^二サハ觀解^一、無^ハ者即空、量^トハ者即仮、寿^ト者即中。仏者三智即^チ一心^ニ具ス。應^レ知ル、円融三觀之智、冥^ニ於円融三諦之境^ニ、万德自然^ニ円ナル^ヲ名^ニ阿弥陀仏^ト。…問。何^カ故^ニ不^レ説^ニ仏ノ余ノ功德^ヲ。解^メ曰ク、諸ノ正教ノ中^ニ明^ニ三世ノ仏^ヲ、但説^ク化用ノ差別^ヲ。不^レ説^ニ内証ノ功德^ヲ。即^チ由^ル内德ハ諸仏無^レ異、利生方便ハ諸仏不同^ニ。菩薩ハ不^レ尔^ヲ。随^レ位德別ノ故^ニ、随^ニ其人^ノ説^ニ内外ノ德^ヲ。

源信は、『阿弥陀經』の密意として「阿弥陀三諦説」を説くが、「仏」の一字についても「三智即ち一心に具す」と述べる。「円融三觀の智」すなわち「仏」が、「円融三諦の境」すなわち「阿弥陀」と冥合し、万德が自ずと円満するから「阿弥陀仏」なのだといふのである。その上で源信は、なぜ『阿弥陀經』は光明・寿命について説くのみで、他の功德に言及しないのかと問いを立てる。「諸の正教の中に三世の仏を明かして、但、化用の差別を説く。内証の功德を説かず。即ち

内德は諸仏に異なり無く、利生の方便は諸仏不同に由る」と答へ、省略されているだけで、実際には名号の内に内証の功德も含まれているのだと主張する。

「逆修説法」四七日の仏德讃歎の冒頭には、次のように記されている。

仏^ニ有^ニマズ惣別ノ二功德^一。先^ツ惣^トハ四智・三身等ノ功德ナリ也。一切ノ諸仏ハ内証等^ヲ具^メ一仏モ無^レ異^ニ。故^ニ、諸經ノ中^ニ説^ニ仏ノ功德^ヲ、惣^メ不^レ説^ニ内証ノ功德^ヲハ、唯別^メ説^ク外用ノ功德^ヲ也。雖^レ尔^ト、爲^ニ善根成就^一、三身ノ功德、如^レ形ノ可^レ奉^レ説^ル説^ル。

法然是「総」の功德として円融三智ではなく四智を挙げてはいるが、『略記』と同様、諸經においては外用のみが説かれ、内証の功德が省略されることに言及する。その上で、「善根成就の爲」として、内証の三身について説明を行う。

先^ツ法身^トハ者^ハ是^レ無相甚深ノ理ナリ也。一切ノ諸法畢竟空寂ナル^ヲ即名^ニ法身^ト。次^ニ報身^トハ非^ニス別物^一、解^リ知^ル彼ノ無相ノ妙理ヲ智恵^ヲ名^ニ報身^トハ也。所知^ヲハ名^ニ法身^ト、能知^ヲハ名^ニ報身^ト也。此^ノ法報ノ功德、周^ニ遍^ニ法界^ニ。無^レ不^レ周^ニ遍菩薩・二乗ノ之上^ニハ乃至六趣・四生^ノ上^ニモ。次^ニ応身^トハ者^ハ爲^ニ濟^ニ度^ニセシカ衆生^ヲ、於^ニテ無^レ際限^ノ中^ニ示^ニ際限^ヲ、於^ニテ無^レ功用^ノ中^ニ現^ニ二功用^ヲ給^ヘル也。

法然は、法身を「所知」としての「無相甚深の理」、報身を

「能知」としての智慧と位置付け、法身・報身は別物ではないと論じる。

この能・所という表現も、『略記』を踏襲したものと思われる。⁽¹⁾源信は『阿弥陀経』所説の「執持名号、若一日：七日、一心不乱」の念仏を「正因」の行と解釈し、次のように解釈している。

若一日二日乃至若七日、面_ニ向_シ西方_ニ、観_ス下ス仏威光、偏_ク照_ス十方、無_キ所_ニ障碍_ス。称_ス上_ル名_ヲ一心_ニ、念_ス願_ヲ生_セン_ヲ彼国土_ニ、淨信無_レ疑_ヒ。応_ニ如_レ是修_ス。：若欲_セハ修_{セント}深観_ヲ、見_ヨ『止観』常行三昧_ノ文_ヲ。或_ハ観_セ無縁_ノ慈_ヲ、是_レ即_チ深観_惠。：意云、無_トハ者法_ノ空、即_チ所縁_ノ理_ヲ、理_性ハ即_チ是_レ法身_ノ菩提_ヲ、故_也。『大般若経』云、「一切法_ノ空_ヲ説_テ爲_ニ法界_ト。即_チ此_レ法界_ヲ説_テ爲_ニ菩提_ト」云。縁_ト者能縁、即是般若_也。般若_ハ即_チ是_レ報身_ノ菩提_也。慈悲利生_ハ即_チ是_レ解脱_也。解脱_即是_レ応身_ノ菩提_也。由_レ此_ニ当_ニ知_ル。無縁_ノ慈悲、是_レ即_チ諸仏三身_ノ万徳_也。故『大般若』云、「諸仏如来_ノ所有_ニ功徳_ノ、大悲_ノ般若_ノ二法_ヲ爲_ニ性_ト。離_ニ分別_ノ想_ノ、無_ニ功用_ノ。利_ニ衆_ニ有情_ノ、無_ニ時_トメ暫捨_ル」⁽²⁾。雖_レ言_フ「二法_ト即_チ具_ス三徳_ヲ。智_及智処_ヲ爲_ニ般若_ヲ」故離_ニ分別_ノ言_ヲ、兼_テ顯_ニ法身_ヲ。無_ニ分別_ノ、一切法_ヲ常住_ナ。乃至補処_ノ所有_ノ徳_ノ、皆是_レ如来_ノ功徳_ノ一分_也。應_ニ知_ル。十方三世_ノ仏衆_ノ法界_ノ、不_レ出_ニ無縁_ノ慈悲_ノ光外_ニ。此中_ノ法身_ノ、偏_ニ自他_ノ身_ヲ、凝然_ニ常住_メ法界_ノ性_{ナル}カ故_ニ。般若_ノ解脱_{、雖_レ無_ニ事用_ノ、無_ニ始時_{ヨリ}来_タ理性_ノ常然_也。行人_{、應_ニ念願_ス。由_ニ無縁_ノ慈光明_ニ所_ニ照_サ故_ニ、得_レ顯_ニ自他_ノ身_{三身_ノ性_ヲ」。}}}

源信は、称名とともに仏の威光を観じるよう勧め、もし密意として深観を修したいと思うならば、「無縁の慈悲」より光明が放たれていることを観じよと勧める。「無」は「所縁」の理性すなわち法身の菩提、「縁」は「能縁」の般若すなわち報身の菩提と位置付け、「慈悲利生」は解脱すなわち応身の菩提なのだから、そこに諸仏の三身万徳が集約されるという。また源信は、法身・報身・応身の三徳は分別を離れており、分別を離れたならば一切法常住なのだから、十方三世の仏衆法界はすべて仏の無縁の慈悲の光に含まれるのだと論じる。そして、三身の中でも法身すなわち理性は、般若・解脱のいまだ顕現しない無始の昔より自他身中にあり続けるのだから、慈悲の光明に照らされた行者の内には、自他の身や三身の性が顕れてくるのだと論じる。

法然が「能縁」「所縁」ではなく「能知」「所知」としたのは、『略記』において『大般若波羅多経』の「諸仏如来の所有功徳、大悲・般若の二法を性と為す。分別想を離れ、功用無し。」という文が引用され、「二法と言うと雖も、即ち三徳を具す。智及び智処、般若を為す」と解釈されていることに拠ったのであろう。また法然が、応身について「衆生を済度せんがために、無際限の中に於て際限を示し、無功用の中に於て功用を現じ給えるなり」と説明するのは、三徳の中の「大悲」すなわち応身の位置付けを下げて、『大般若経』の「分

別想を離れ、功用無し」という表現を反転させたのであろう。

このように、法然は『略記』に則りつつ三身を説明するが、「此の法報の功德、法界に周遍せり」と、法身のみならず報身の功德も法界に遍満することを強調している。法身に重きを置く『略記』の「無縁の慈悲」釈と比較したならば、人格的な報身のはたらきがより強調されている。

また、『逆修説法』六七日の仏徳讃歎の冒頭には、次のように記されている。

名号ノ功德ハ、一切ノ諸仏ニ皆、有_二マ_ス二種ノ名号_一。謂ク通号ト別号ト也。…阿弥陀仏_{ニモ}有_二マ_ス通号・別号_一。阿弥陀_{トハ}者別号也。此_{ニハ}云_二無量寿・無量光_一。此ノ別号ノ功德ハ、前々ニ奉_レ尺候_キ。通号_{トハ}者云_レ仏ト是_{ナリ}也。一切ノ諸仏、皆、具_二下_{ヘリ}此ノ名_一。一仏_モ無_レ替_ル。仏_{トハ}者具_二上_ハ云_二仏陀_一。

法然は、「阿弥陀」の別号は無量寿・無量光を意味するのでと再度確認した上で、通号の「仏」を取り上げる。その説明の中で法然は、『往生要集』より、様々な功德がみな同等であるから「仏陀」などと呼称するのだと述べる文を引用する。また『西方要決』の文を引用して、名号の功德が殊勝であるのも、願行を成就したことを表す「仏」の一字のためだと主張し、その文を「阿弥陀」の三字の解釈に用いる永観の『往生拾因』について、「尺_二成_{セラレタルハ} 別号ノ功德ノ大善_{ナル}

様_ヲ者僻事也⁽¹⁴⁾」と批判する。続けて「然_ニ、阿弥陀ノ三字_ヲ付_レキ名_ニ給_ル故_ニ、功德殊勝_{ナル}仏_{ニテ}坐_マス様_ニ申_ス人_モ候_{。其_{レハ}僻事_{ニテ}候也}」と同内容の批判が繰り返されることから、法然の批判は永観以外にも及ぶものと思われる。

おわりに

法然は、『逆修説法』三七日の仏徳讃歎の説法において阿弥陀仏の寿命を説明する際に、源信の『略記』の「弥陀の名義を明かす」一段の解釈を受用する。その一段と『逆修説法』の仏徳讃歎の間には、他にも①二身論を説く、②二種の光明を挙げる、③「阿弥陀」の三字のみならず「仏」の一字にも注目する、④名号に外用のみならず内証の功德も含まれると解釈する、などの共通点が見られる。法然は『略記』の論理的枠組みを共有しながら、『逆修説法』の仏徳讃歎の説法を構成した可能性が高い。

ただし、両書の間には相違点も見られる。『略記』は、経の顕意の説明においては阿弥陀仏を応化身と位置付け、その光明は「常光一尋」「別縁偏照」の光と異なると述べる。また、経の密意の説明においては「阿弥陀三諦説」を説き、称名のみならず「無縁の慈悲」を観じることが勧める。「無縁の慈悲」釈においては、阿弥陀仏の功德が諸仏の万徳三身にまで拡大解釈され、三身の中でも法界に常住する法身が重視され

る。それに対して法然は、阿弥陀仏は真身と化身、常光と神通光のいずれをも具えていると説明している。三身の説明においては、『略記』の「無縁の慈悲」釈を援用しつつも、人格仏である報身のはたらきを強調する。そして六七日においては、「阿弥陀」の別号よりも、願行を成就した人格身であることを示す「仏」の通号を重視すべきことを強く主張する。

このように、『略記』と比較することで、『逆修説法』仏徳讃歎における法然の意図や独自性を、より明確に把握することができる。

- 1 『黒谷上人語燈録写本集成』 一巻一九三—一九四頁。
- 2 『恵心僧都全集』 一巻三九九—四〇一頁。
- 3 『黒谷上人語燈録写本集成』 一巻一四一頁。
- 4 『黒谷上人語燈録写本集成』 一巻一八三頁。
- 5 『黒谷上人語燈録写本集成』 一巻一八三—一八四頁。『往生要集』第四大文「正修念仏」、観察門の雑略観（『浄全』十五・八四頁上）。
- 6 法然は『三部経釈』（『昭法全』三三頁）において、この「横豎の益」の表現をそのまま受用している。
- 7 『黒谷上人語燈録写本集成』 一巻一八七頁。
- 8 村上論文において「観解」「深観」などが『阿弥陀経』の密意を指し示す語句であることが指摘されている。
- 9 『黒谷上人語燈録写本集成』 一巻二一七頁。
- 10 『黒谷上人語燈録写本集成』 一巻二一七—二一八頁。

法然の阿弥陀仏解釈（齋藤）

- 11 曾根論文において指摘されている。
- 12 『恵心僧都全集』 一・四一—四一二頁。
- 13 『黒谷上人語燈録写本集成』 一巻二六四—二六五頁。
- 14 『黒谷上人語燈録写本集成』 一巻二六七頁。

〈二次文献〉

- 法然『逆修説法』浄土宗総合研究所編『黒谷上人語燈録写本集成』第一巻、浄土宗出版室、二〇一一
- 源信『阿弥陀経略記』比叡山専修院、叡山学院編『恵心僧都全集』第一巻、思文閣、一九二七

〈二次文献〉

- 香月乗光「法然教学に於ける称名勝行説の成立」『仏教文化研究』第四号、一九五四
- 村上明也「源信における「無量寿三諦説」成立の再考」『仏教学研究』第六四号、二〇〇八
- 安孫子稔章「逆修説法」における源信の影響について」『仏教文化学会紀要』第二五号、二〇一六
- 曾根宜雄「逆修説法」四七日の三身論と『阿弥陀経略記』の三身論について」『仏教論叢』第六一号、二〇一七

〈キーワード〉 法然、『逆修説法』、『阿弥陀経略記』、阿弥陀仏、

仏身

（東海学園大学専任講師、博士（文学））